

建設主体のGPIに直接取材 「反対を押し切る事はしない」



建設候補地の上紋峠の周辺には国有林が広がる。標高8百～9百メートル、数百ヘクタールの山岳地帯に最大50基もの風車を設置する計画。事業を進める場合、保安林の指定解除などの手続きも必要になる

「風況調査」など基に立地選定 知らなかった、風発の先人の話

巨大風力発電所（風発）の建設計画を進める（株）グリーンパワーインベストメント（以下GPI。坂本満代表取締役社長・本社＝東京都港区）は

士別市と滝上町との境界にある上紋峠の周辺で進む、陸上型では国内トップクラスの「最大高さ150～222メートルの風車50基、合計30キロワット」の巨大風力発電所（風発）の建設計画。事業者の（株）グリーンパワーインベストメント（GPI）は今年になり、滝上町内で2回の説明会を開催し、9月には環境影響評価（アセスメント）の第一段階となる「配慮書」を公表する予定だ。不透明な中東情勢などの下で建設コストが急上昇し、再エネ事業の将来性に黄信号がとる中、本場に北海道内陸部での巨大風発事業は可能なのか――。6月中旬、東京のGPI本社を訪れ、担当者らに直接疑問を投げかけた。（ルポライター・滝川康治）

2004年、総合商社トーマン（現・豊田通商）の元役員で米国での風発事業に携わった堀俊夫氏（故人）らが設立した。

同社は日本における再生可能エネルギー（再エネ）企業として古株の存在で、数千キロワット級の大規模風車

を何十基も林立させ、中央の送電網に売電して利益を上げるシステムを構築してきた。

現在の社員数は3百人ほど。風力や太陽光の発電所を操業し、近年は石狩湾新港の洋上風発や沿岸部では国内最大級のウインドファームつがる（いずれも11～12万キロワット級）などの商業運転を始めている。

赤坂の一等地にあるビルのワンフロアがGPIの本社。今回の取材では、発電所設置の計画づくりなどを担う事業開発本部でグループ責任者を務める鳥海陽平さんと瀬野太郎さん、対外連携推進・運営室長の力石晴子さんが対応してくれた。

冒頭の事業概要の取材中、「GPI創業者は、日本で最初に風力発電をやった男」との説明があったので、筆者は「それは事実と違う」と指摘した。くだんの上紋峠一帯に隣接する名寄市にはかつて、風力発電史に残る山田基博さん（1918～2012年）という先人がいたからである。開拓農家の生活救済を目的に小型風車を発明し、1940～50年代にかけて無電化地域の解消に貢献。その「山田式風車」は戦後、アジア各地にも輸出された。寒風の中でランプ



上紋峠の周辺では2023年11月から「風況調査」が続いている

生活を送る開拓民に寄り添うその生き方は、地域の歴史や自然環境をよく知らず、経済合理性だけで大型風車を導入する現代の再エネ事業者とは対照的だ。残念ながら、この日対応したGPIの中堅幹部たちは「山田式風車」のことをほとんど知らなかった。

以下、取材時のやり取り（要旨）の一端を紹介する。

＊

——上紋峠周辺の着目理由は、鳥海陽平・事業開発第1グループマネージャー 気象台のデータなどをシミュレーションして推定した

「風況マップ」によると、オホーツク海側で年間平均風速が9メートルと強い。それらを目安に当たりをつけ、適地を洗い出しました。

現地は国有林かつ保安林であり、（建設には）森林法の要件をクリアする必要がありますが、国有林は再エネの利活用は認められています。岩手の住野遠野風発（稼働中）は同様のケースであり、下北風発（着工準備中）も一部が保安林です。

（適地の選定には）風車の規模や近くに連携できる送電線の有無などが重要になります。最近では、住居との距離や景観などの問題、〇〇を建ててはいけないといった条例がある場合は避けるなども。上紋峠にはそれらの問題はなかった。

——地元自治体に対する告知は？

鳥海 23年に行ない、「（風況の）観測には特に問題がない」という主旨の同意書をもらっています。同年11月に観測塔を設置し、年間平均風速が結構大きい地域と分かった。一般的に沿岸部は風の乱れが少なく、標高が高いほどきれいな風速が得られる傾向にある。広大な敷地があり、工作物に影響がなく、立地上も共存しやすいということで選ばれました。

新規事業のコストが上昇して、厳しさを増す風発の立地環境

——現地は半年以上も雪に閉ざされ、雪上車やスノーモービルがないと点検にも行けません。建設費が高騰する中で、消費者が負担する再エネ賦課金や補助金がないと事業はできないのでは。

瀬野太郎・事業開発第5グループ長 為替の状況もあり、建設コストや資材費、人件費がすぐ上昇していることは間違いありません。企業環境としては厳しい状況ですが、我々も再エネ賦課金を軽減し、国民の負担を減らさなければならぬことは承知しています。

（固定価格買い取り制度に基づく1キロワット・時の）売電単価は、12年当初の22円から下がり続け、最近になって少し上がって14円。しっかりとした事業計画を作らなければなりません。建設コストが上がる中で売電単価が減らされると大変厳しいわけです。

そうした中で、環境に対する影響に配慮し、地域の人たちとの合意形成を図っていかないといけない。事業を始めてみたら反対運動が起きた

瀬野 秋田でも落雷事故があり、「リスクはゼロだ」とは言えません。火災の発生は風発のリスクであり、しっかりとしたメンテナンスを行



梶延町内の「浜里ウインドファーム」では23年の稼働後、バードストライクが相次ぐ(22年夏撮影)

鳥海 どこに風車を設置するのか、まだまだとまっています。地すべり地形があるから(風発を)置かないのか、法規制をクリアしてから調査するのか——個々の事情によって異なり、今は初期段階です。

瀬野 風車を建ててみたら地すべり地形の上だったというケースもあり、遅かれ早かれ調査を進めたい。

——滝上町内で宮農飲雑用水の水源として利用されている地域では、今でも山をいじると濁水の影響が出るといいます。

瀬野 上水道はもちろん水源の有無について確認し、工事中の濁水については最大限の配慮をするしかありません。土砂防止柵や沈砂池の設置などをやっていききたい。

——土別市長の懸念事項のひとつは落雷にともなう火災事故でした。

鳥海 それ自体が事業リスクであり、軽い調査を進めるのは我々のほうに尽きます。

——地元の野鳥に明るい人によると、猛禽類のオジロワシやオオワシは土別市の朝日地区まで飛来しているそう、風発の計画地域での生息を前提に考えるべきでしょう。それと、地元の皆さんが心配しているのはヒグマに対する影響です。

瀬野 有名な猛禽類の営巣が確認されている地域ではないと思うが、調査すると希少猛禽類は出てくるでしょう。越冬個体もあるかもしれないので、立地の時に避けることができ得る地域では。野鳥に詳しい方の意見を聞きながら、と考えている。

——バードストライクの対策は？

鳥海 それ自体が事業リスクであり、軽い調査を進めるのは我々のほうに尽きます。

鳥海 そのルートは、まだなんとも言えません。いろんなやり方があるが、電力会社側は基本的に「自営線で作って」と言う。(自営線は)道路沿いに埋めるなど、いろいろな方法があります。原生林や風光明媚なところに送電線は通しません。

——今後の展開ですが、自治体は事業者に対して受け身で、後ろには国策が控えている。

鳥海 南に行くとな川町の高規格道路沿いに送電線があるので、そこに接続したい。この送電線は東から西に走り、旭川まで行っています。

——そこで既設の幹線網とつなげる、と。風発から既設の送電線までの間はどうか。

鳥海 そのルートは、まだなんとも言えません。いろんなやり方があるが、電力会社側は基本的に「自営線で作って」と言う。(自営線は)道路沿いに埋めるなど、いろいろな方法があります。原生林や風光明媚なところに送電線は通しません。

——今後の展開ですが、自治体は事業者に対して受け身で、後ろには国策が控えている。

瀬野 我々は丁寧に説明するし、事業をやらせてもらうからには、この地域を元気にしたい。前段で不安の声があり、地元の反対を押し切って進めることはしません。しっかりと意思疎通を図り、合意形成をしていければいい。そこは話し合いではないでしょうか。

(6月15日、GPI本社で収録)

※本年5月号に掲載した清原尚弘滝上町長のインタビュー記事で、本人のプロフィールに一部誤りがありました。正しくは「97年に町役場に奉職し、企画や財政などの部署を担当」です。訂正します。

とか、赤字になるのでは目も当てられません。事業環境が厳しくなりつつあるがゆえに、よりしっかりと計画にする必要があると考えます。

鳥海 風況調査を始めた時には今ほど環境は厳しくない状況でしたが、現在は慎重にやっています。我々は見積を取り、その数字を基に言っている、何となくの雰囲気ではありません。

——4月の滝上町での法定説明会で、「そんなに風力発電は儲かるのか？」と尋ねた住民の声は率直なもので、赤字になるのでは目も当てられません。事業環境が厳しくなりつつあるがゆえに、よりしっかりと計画にする必要があると考えます。



取材に応じた事業開発部門の鳥海陽平さん(左)と瀬野太郎さん

鳥海 道内の最近の動きとして、小樽市や市民の反対で双日による風発計画が暗礁に乗り上げ、隣の余市町では関西電力による計画に対し、町長が不同意を表明。つい先日、函館市議会が寛沢地区風発計画の抜本的見直しを求める決議を全会一致で可決し、函館市長も同様の方向で臨む旨を表明しました。これら最近の動きは、上紋峠での計画の行方に影響を及ぼします。

瀬野 ある意味で鋭い質問とか。我々は目茶苦茶儲かっているわけではなく、赤字になるのに投資する判断はできないのです。

大きな環境影響あれば立地困難アセスなど慎重に対応していく

滝上町の説明会では、自然環境に対する影響などに多くの懸念が示されている(5・6月号を参照)。土別市の渡辺英次市長も、防災面や関連工事に伴う生態系への影響、稼働後の廃棄物処理などに疑問を投げかけた(先月号)。こうした中で、今年9月には環境影響評価(アセスメント)法に基づく「配慮書」の公表が予定されているが、事業者としてどうするか——。



上町内で開かれた環境アセス説明会。「風発はそんなに儲かるのか？」との質問も(4月16日)

鳥海 陸上風力のアセス項目には「土砂流出対策」はありませんが、関

瀬野 計画は環境アセス法の対象になっており、我々も環境に対する影響があるような地域に風車では、ゆくゆくは事業を進められなくなります。計画段階で立地選定や風車の配置などを予測評価し、なるべく影響を回避・軽減することが基本です。そうしなければ「再エネで脱炭素です」と言っても受け入れてもらえないでしょう。

鳥海 道南の瀬棚や上ノ国などでは風発に対する受け止め方が全く違い、「リスクがあるのは分かっている」として利用する」という姿勢です。そうした自治体も取材してはどうか。

——旭川以北の内陸部は、日本に残された数少ない自然環境に恵まれた地域であり、将来、それが大きな財産になる。地域で小さな風車を運営するといった、「地産地消型」で環境に極力影響を与えないところに建てるのであれば、誰も反対しないでしょう。

瀬野 我々は丁寧に説明するし、事業をやらせてもらうからには、この地域を元気にしたい。前段で不安の声があり、地元の反対を押し切って進めることはしません。しっかりと意思疎通を図り、合意形成をしていければいい。そこは話し合いではないでしょうか。

(6月15日、GPI本社で収録)

心が高いのは、そのあたりの問題があるからです。低周波音も(アセスでは)必ずしも「調査しなさい」とされないが、関心が高い。

社会で議論されていて(アセスの手法は)すぐには変わりません。そうした意見を取り込み、必要なことをやるしかない。我々は、本当に影響があるなら事業は実行できないと考えています。そこまで覚悟しないと、今の陸上風力は難しくて。だからこそ案件を社会に提起することを慎重にやっています。

地すべりや水源、風車の事故：住民や自治体の懸念に対応策は

——地すべり地形に対しては？

瀬野 防災科学技術研究所の「地すべりマップ」の机上検討だけでは、細かな地形の分布や地形の安定度合は分かりません。不安定な地すべり地形の上に風車を建てると地盤が動いていくことが一番のリスクになるので、気を遣っています。既往の情報に加え、実際の調査によって分布状況や安定度を調べ、(地すべり地形を)避けることになります。

——地すべり関連の調査はいつから実施するのか。